
東アジアの思想と構造



新聞「泊園」について

——昭和初期における泊園書院の記録

吾 妻 重 二

On the *Hakuen* Newsletter

—a Historical Resource for Understanding the Hakuen Academy
in Showa Period Japan

AZUMA Juji

Newsletter *Hakuen* was a publication of the Hakuen Academy, a private school for Chinese studies based in Osaka Japan. This newsletter was published over a period of sixteen years, from 1927 to 1943. FUJISAWA Koha and ISHIHAMA Juntaro were responsible for editing *Hakuen*, with ISHIHAMA playing a particularly important role in deciding the policy of the newsletter, as well as article writing. The students of Hakuen Academy also greatly contributed to editing the newsletter.

Hakuen managed to be published throughout the Showa period despite facing many difficulties, not least of all the Second World War. It is an extremely important resource, not only for understanding the activities, academic interests, and personal connections of the Hakuen Academy, but also for gaining a greater understanding of Sinological studies in modern era Japan overall, as well as the arts and culture of Osaka.

This paper will examine the relevant bibliographic data of *Hakuen*, and then go on to discuss the policy direction, editing staff and the distinctive characteristics of the articles of this important newsletter.

キーワード：泊園書院 藤澤黄坡 石濱純太郎 藤澤東咳 藤澤南岳 中山城山

はじめに

新聞「泊園」は大阪の漢学塾、泊園書院が昭和二年（1927）から十八年（1943）まで発行したものである。

文政八年（1825）、高松藩出身の藤澤東咳によって開かれた泊園書院の特色の一つは明治・大正を経て昭和時代になってもなお存続、隆盛したことにあるが、それが可能だったのは何と云っても書院第四代院主の藤澤黄坡（1876-1948）、および黄坡義弟の石濱純太郎（1888-1968）の力量と情熱によるところが大きい。

幼少期から父南岳の薫陶を受け、東京高等師範学校・国語漢文専修科の第一期生だった黄坡が伝統的な漢学者であり漢詩人だったのに対し、十二歳年下の石濱は東京帝国大学文科大学・支那文学科で学び、卒業後、京都帝国大学教授の東洋史学者内藤湖南に師事して新たな東洋学の開拓を目指していた。石濱が敦煌文書やチベット研究、蒙古語や西夏語の研究などにおいて先駆的業績を残した、いわば東洋学のパイオニアであったことは改めていうまでもない。石濱はしかし、伝統漢学の世界に深く共鳴し、その方面の研究も多く、したがってまた黄坡への敬意を生涯失うことがなかった。

漢学の良き伝統を受け継ぐ黄坡と、これを基盤として近代的学問を展開しようとする石濱——この二人は、戦前の時期、大阪の学問・文芸の世界における見事なパートナーだったといえよう。黄坡はもちろん、石濱が泊園書院での講義に情熱を傾けていたことも数々のエピソードが示すとおりである。

さて、新聞「泊園」はこのような新旧の特色をあわせもつ学問所の刊行物として生まれた。この時期、黄坡は関西大学専門部に講師、ついで教授として教鞭をとるなど多忙であり、本誌の編集に限っていえば、これに尽力したのは石濱であって執筆記事もきわめて多い。昭和初期、市井の漢学塾がこれだけの新聞を刊行し続けるというのは容易なことではなく、全国でもまれなケースであろうが、ともあれこの新聞についてこれまで論じた研究がないことにかんがみ、ここでは刊行の経緯や内容、書誌事項、編集にあたった門人などについて紹介、考察するとともに、その特色についても整理してみたい¹⁾。

一 刊行の趣旨と書誌事項

1 刊行の趣旨

新聞「泊園」は昭和二年（1927）の暮れも押し詰まった十二月二十二日に発刊された（図版1）。題字の「泊園」は南岳の遺筆である（第一号「編集室より」）。本誌の趣旨については、石濱が第一号の巻頭に「発刊の辭」として次のように述べている。いま全文を掲げる。

泊園の學術は代々傳ふる事四世に涉り、歳を閱する已に百年を越え、及門の子弟は實に數千人に及ぶ。その源の遠き、その流れの久しき、その徒の博き、皆以て傳稱するに足る。況や絃誦依然舊の如くにして絶えず、利祿奔走の間に於て屹然中流の砥柱たるをや。顧ふに、斯の道を傳へ斯の文を守り斯の學を存し斯の業を弘むるは、及門の徒同志の士の皆自ら責とする所なるべし。泊園同志各地の諸會合に談問々之に及ぶあるを熟聞せるは、我等の最も喜ぶ所なり。然も師弟通訊の方同窓

1) 関西大学には新聞「泊園」が次のように2部所蔵されている。あとの方は2015年6月、藤澤章子氏より泊園記念会に寄贈されたものである。

- 関西大学総合図書館・泊園文庫蔵本（LH2* 丙*85）
- 泊園記念会蔵・藤澤章子氏寄贈本

このほか、新第三十一号（昭和十三年一月）だけは冊子体により「発行十年特輯号」と題して刊行されている。

- 泊園 発行十年特輯号 関西大学総合図書館・泊園文庫蔵本（LH2* 丙*99）

以上の三本を併せることにより、本誌のほぼすべてが揃うことになるが、ただ第一巻第一号（昭和十七年七月刊行か）だけが欠けている（後述）。なお本誌は記事一覧や人名索引をつけて、2017年3月、関西大学東西学術研究所より影印出版の予定である。

報問の途を缺けるは、大方の久しく以て甚だ遺憾とする所なりき。乃ち相謀りて一小紙を排印し、題して泊園といひ、毎月一回之を發行し、以て漢學を鼓吹し又一には書院學業の現情を、二には藤澤師家の安福を、三には泊園諸會合の状況を、四には前輩同窓の動靜を通報するに資せんとす。但だ道德學術文章の大に至つては、固り一小紙の任に堪ふる所に非るも、亦稍々鉤玄纂言する所あるべく、要は徒らに空議放論に墮するを慎まんと欲す先輩所兄の共力贊助を吝む無からん事期望に勝へず。

これによれば、百年を越える歴史と数千人におよぶ門人を有しながら門人間の連絡を欠き、泊園の学問を広く喧伝できないことが関係者間で遺憾とされており、そこで本誌を刊行することにしたという。その目的は大きく二つあり、第一に漢学の鼓吹、第二に関連情報の広報がそれである。このうち広報すべき情報としては、一、泊園書院における講学の現状、二、院主である藤澤家の消息、三、泊園関連の諸會合の状況、四、前輩同窓の動向を挙げている。また「道德學術文章」に関する本格的な議論を載せるのは新聞という性格上むずかしいが、何がしかの示唆や連載を行なうことは可能だろうという。

この時、石濱は満三十九歳。南岳と黄鵠亡きあと——南岳は大正九年（1920）に、黄鵠は大正十三年（1924）に死去している——、泊園書院を黄坡とともに継承、発展させていこうという意欲に溢れている。石濱は二年前の大正十四年二月、内藤湖南に随伴したヨーロッパの資料調査旅行から帰国したところであり、また本誌発刊の直前の九月には王国維を記念して高橋盛孝やニコライ・ネフスキーらと「静安学社」を結成するなど、この頃新進の学者として充実の時期を迎えつつあった²⁾。そうした情熱が本誌の発刊を後押ししたのであろう。

本誌はまた「泊園同窓会」や「泊園会」、「有声会」といった泊園関連組織の機関誌という性格ももっていた。「泊園同窓会」は泊園で学んだ門人たちの集まりであり、「泊園会」は泊園同窓会メンバーの有力者で作るその上部組織、「有声会」は竹屋町の分院（のち本院）における黄坡の受講生が作った同窓会組織である。このことは発刊の際の祝辞に「泊園同窓會及有聲會其他泊園書院關係の報道機關として本誌の創刊せられたるは寔に悦びの極みなり³⁾」とあることからわかる。あとにも述べるように、本誌発行の費用は、多くこれらの関係者からの寄付によってまかなわれた。

ところで、かつて南岳時代の泊園書院では、明治後半から大正六年頃まではほぼ毎年一回、『泊園同窓会誌』という冊子を出していたことがある。この雑誌は書院の活動や院主・会員の消息、「文苑」「詩壇」といった漢詩文欄、会計報告、同窓会員名簿などを載せて会員の相互連絡と親睦をはかるものだったが⁴⁾、本誌はこれを受け継ぎつつ、黄坡・石濱時代になう新たな装いのもとに創刊されたといえる。かつての『泊園同窓会誌』と最も違うのは、石濱らの意思により漢学復興・奨励のための学術誌的性格を強めたことであろう（後述）。

2) 「泊園書院年譜」、吾妻重二編著『泊園書院歴史資料集』（泊園書院資料集成1、関西大学出版部、2010年）403頁。

3) 辻松石「發刊を祝して」（第二号、昭和三年一月）。

4) 注2前掲、吾妻編著『泊園書院歴史資料集』295頁。編輯兼発行者は篠田栗夫および梅見春吉。

2 刊行時期および基本書誌

本誌はこれ以後、全部で次の三期に分けられ、合計七十八号が刊行されたようである。

- 第一期 第一号（昭和二年十二月二十二日）～第十五号（昭和五年十一月三十日）——計十五号
第二期 新第一号（昭和八年一月一日）～新第五十六号（昭和十七年五月二十七日）——計五十六号
第三期 第一卷第一号（昭和十七年七月か）～第二卷第四号（昭和十八年九月三十日）——計七号

このうち第二期については、第一期と区別するために「新」の字を冠して呼ぶことにする。もともとこれを「新泊園誌」と呼んだのは石濱であった（後述）。また、第三期の第一卷第一号だけは現在、欠号となっている。

なぜ、このように三期に分かれたのかはあとで触れるとして、ひとまずこれらの書誌事項を、各期の最初の号（第三期のみは第一卷第二号）の題字下の刊記や編集者名の記載により掲げておく。

第一期

毎月一回 一日発行
本紙定價 一部金拾錢 一年前金一壹圓（郵税共）
編輯發行兼印刷人 吉田萬治郎
印刷所 大阪活版所
發行所 泊園社 大阪市南區竹屋町九番地 泊園書院内
泊園社編輯同人 石濱純太郎 吉田萬治郎 熊澤猪之助

第二期

隔月一回 一日発行（非売品）
編輯兼發行人 梅見春吉
印刷所 林泰進堂印刷所
發行所 泊園誌社 大阪市南區竹屋町九番地 泊園書院内
泊園誌發行委員 顧問 黄坡 石濱兩先生
編輯 本條 多田貞 松浦三氏
校正 本條 多田 石崎三氏
通信 岡本 村田 竹中三氏
發送 林 久保田 田中三氏
連絡 穎川氏

泊園誌社編輯同人 梅見春吉 多田貞一 本條平太郎 的場信太郎

第三期

隔月一回 不定期発行（非売品）
編集兼發行人 石崎太郎
印刷所 林泰進堂
發行所 泊園誌社 大阪市南區竹屋町九番地 泊園書院内

泊園誌社 顧問 石濱純太郎

同人 的場信太郎、岡本奇堂、三原静美、石崎太郎、岡本勝治郎

3 書誌の変遷など

このように16年間という長期にわたって続いた本誌は刊行日にせよ編集者にせよ、一定の変化が見られる。次に、主な書誌情報の変遷を本誌の刊記その他によりやや詳しく示しておこう。

(1) 刊行日

第一号より	毎月一回	一日発行
第十一号より	毎月一回	五日発行
第十三号より	毎月一回	十日発行
新第一号より	隔月一回	一日発行
新第三十八号より	隔月一回	五日発行
新第三十九号より	隔月一回	不定期発行

(2) 編輯兼発行人

第一号より	吉田萬治郎（編輯発行兼印刷人 第四号より編輯印刷兼発行人）
新第一号より	梅見春吉
新第九号より	的場信太郎
新第五十六号より	石崎太郎（第二卷第一号より編輯発行人）

(3) 編輯顧問

新第一号より	藤澤黄坡、石濱純太郎（泊園誌発行委員顧問）
新第九号より	藤澤黄坡、石濱純太郎、梅見春吉（編輯顧問 新第十四号より泊園誌社顧問）
新第三十一号	石濱純太郎
新第三十二号より	藤澤黄坡、石濱純太郎
新第三十八号より	石濱純太郎

(4) 編輯同人

第一号より	石濱純太郎 吉田萬治郎 熊澤猪之助（泊園社編輯同人）
第九号より	石濱純太郎 吉田萬治郎 三崎麟之助
第十一号より	石濱純太郎、吉田萬治郎
新第一号より	梅見春吉、多田貞一、本條平太郎、的場信太郎（泊園誌社編輯同人）
新第九号より	多田貞一、本條平太郎、的場信太郎（編輯同人）
新第十三号	石崎太郎、本條平太郎、的場信太郎
新第十四号より	本條平太郎、穎川康、石崎太郎、三原静美、岡本喜三、安達亀造（泊園誌社同人）
新第十九号より	石崎太郎、三原静美、岡本喜三、安達亀造、的場信太郎
新第二十号より	石崎太郎、三原静美、岡本喜三
新第三十号より	的場信太郎、石崎太郎、三原静美、岡本奇堂（喜三）
新第三十七号より	的場信太郎、岡本奇堂、三原静美、石崎太郎、岡本勝治郎

第二巻第一号より 岡本勝治郎、石崎太郎、三原研田（静美）

(5) 発行所

第一号より 泊園社
新第一号より 泊園誌社

(6) 印刷所

第一号より 大阪活版所
新第一号より 林泰進堂
第二巻第一号より 不二印刷株式会社

(7) ページ数とサイズ

基本は四頁。一枚の大紙（B3よりひと回り小型）を中央で半分に折り、表裏で四頁仕立てにしている。ただし、第一号は六頁、新第二十二号は八頁。また「発行十年特輯号」の新第三十一号はA5版の冊子体で三十二頁。附録なども時折あるので、これらを含めたサイズを示せば次のとおりである。

新聞

第一号以下 31.5×22.2センチで、以後、まれに上下がやや短くなくことはあるが、幅はほぼ同じ。ただし、第二巻第一号から第二巻第四号（最終号）はやや小さく、29.5×21.2センチ（ただし第二巻第二号は30.5×21.5センチ）
新第三十一号 冊子体で、22.1×15.3センチ

附録

新第四号附録 城山道人稿 24.5×33.5センチ（枠は16.6×24.7センチ）
新第十号附録 甘谷先生百七十年祭記念 30.5×27.5センチ
新第十一号附録 城山道人稿 24.4×33.6センチ（枠は17.8×26.5センチ）
*以後に附録される城山道人稿のサイズはほぼこれと同じ
新第十二号附録 泊園会第一回定時総会報告書 19.5×54.2センチ
新第二十号附録 藤澤黄坡先生華甲祝賀会の通知 26.6×48.3センチ
文字面の天地（上下の高さ、○を含む）は16.1センチ
新第二十五号広告 城山道人稿完結に就き急告 15.1×21.3センチ

(8) 附録「城山道人稿」について

第二期には附録として中山城山の「城山道人稿」がところどころに添付されている。現在残っているのは三、四、五、六、七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十七、二十八、二十九、三十の十六葉であって、一、二、八～十七、二十五、二十六の十四葉が欠けている。それがわかるのは、新第二十五号に附された広告「城山道人稿完結に就き急告」に、新第三号に第一葉を添付して以来、全部で三十葉を配布した、とあるからである。

ちなみに中山城山（1763-1837）は東暎の師で、新第一号（昭和八年一月）にすでに城山の略伝を載せているので、この頃、泊園のルーツとして城山を研究する機運が高まっていたようである。「城山道人稿」は城山の子、鼈山手筆による写本であり、その後、昭和十二年（1937）四月、これ

らの附録に残りの部分を併せ、泊園書院から「泊園叢書」の第一冊『城山道人稿』（一冊、和装本）として黄坡の跋を附して刊行された⁵⁾。

(9) 綴込表紙

布クロス製の本誌専用綴込表紙で、泊園門人の安達亀造により制作され、実費で頒布された（第十二号の外側余白記事）。第十二号および第十三号にその写真を載せ、また新第五号や新第十七号には広告が載っている。題字の「泊園」は本誌の題字と同じ南岳の筆である。

二 編集者と発行費用

1 第一期

さて、本誌の責任者は黄坡と石濱であり、特に石濱の貢献は大きかったが、上に示したように実際の編集・発行作業には多くの泊園門人があたっており、その苦労にも並々ならぬものがあった。この作業を行なった主な門人は、第一期は吉田萬治郎、第二期は梅見春吉、的場信太郎、多田貞一、第三期は石崎太郎、岡本勝治郎、三原研田（静美）らである。

そもそも、泊園書院に新聞の必要性を訴えたのは吉田萬治郎（?-1942）であった。吉田は黄坡門人で、当時最も優秀な塾生の一人であった⁶⁾。本誌第一巻の編集後記である「編集室より」（筆者の一楽庵は吉田の筆名）によれば、大正の中頃、「浪華に於ける漢學界の一大權威たる泊園書院が學説を發表する機關誌を持たず同窓生の動靜を知る能はざるは一大恨事なり」と考えた吉田は、黄坡および石濱にその発行を懇願したが、時期尚早とされて当面は立ち消えになった。しかし、昭和二年（1927）十月、石濱から新聞発行の計画があることを聞かされた吉田は「飛び立つ思ひで賛意を表し」、さらに十一月、黄坡と石濱から本誌の編集にあたるよう依頼された時は「一層の喜びに満身の血は燃ゆる思ひであつた」という。

こうして編輯兼発行者となった吉田の奮励努力によって、まもなく十二月二十二日に本誌が発刊されるのである。吉田は「製版印刷原稿整理に或は編輯上諸種の指導を先輩に乞ひ同人諸氏の應援を得て茲に漸く出來上つた」と、その苦労をふり返っている。

第一号の内容は、前述した石濱の「發刊の辭」に始まり、黄坡の「先師遺聞」「泊園雜感」といった隨筆、書院の時間割である「泊園書院日課」のほか、泊園会に関する「第二十二回泊園會記」や漢詩、藤澤家の人々に関する「師家の御消息」、「有声会消息」など、さまざまな記事を載せている。泊園同窓会に関しても「泊園同窓會併追悼會記事」や追悼会での弔辭、泊園同窓会會計報告、泊園同窓会員の「氏名住所録」など多くの紙面を割いている。

このように石濱を統括者、吉田を編集部責任者とし、整った体裁のもとに出発した本誌であったが、しかしその後の歩みはけっして平坦なものではなかった。

早くも翌昭和三年（1928）六月の第五号で、吉田は編集者の献身にもかかわらず「一向玉稿が集まり

5) 現在、『城山道人稿』の原本は泊園文庫・自筆稿本類の中に蔵されている。請求記号はLH2*丙*88。

6) 岡本勝「泊園の憶出（續）」（新第四十四号、昭和十五年三月）に、大正初期のこととして「何時も吉田君が最上の首席を占めてゐた」という。

ませぬ」(「編輯漫語」)と嘆いており、さらに毎月一回発行のはずが、第八号と第九号の間を一年以上空けてしまうという事態をきたしてしまった。これについて石濱は「発行遅延のお詫び」と題して、

今後は是非毎月定期の例に背かない様に懸命に努力する。自分は懸命に奮發するが、どうか先輩同學諸兄の御後援を願ひたい。自分の孤軍奮闘丈では決して大方の満足を得るわけには行かないし、諸兄の盛大なる後援を得るならば本誌の擴大すらもわけはないのである。願くは諸兄の御投稿を時に賜はる事だ。(第九号、昭和五年四月)

と述べている。本誌の記事執筆に「孤軍奮闘」していた石濱が、泊園関係者に積極的な投稿を募るといふ切実な訴えである。「毎月定期の例に背かない様に懸命に努力する」「自分は懸命に奮發する」といった言葉が、石濱らの苦心をよく物語っている。

さて、吉田は百三十銀行、ついで安田銀行大阪支店に勤める会社員であった⁷⁾。みずからの仕事をおろそかにすることができなかつた彼は、多忙と病のため、三年後の昭和五年(1930)十一月、第十五号の刊行を最後に、とうとう編集者を退くことになる。このことにつき、黄坡はのちに吉田を回想しての次のようにいっている。

昭和二年の十二月に第一號を發行した。發行人は固より君である。其の經驗と才識とによって第一號既に整然たる面目を備へ、見る人をして驚嘆せしめたのであつた、しかし君の慘憺たる意匠は大抵ではない、これは日々報告にあづかつた叟の感心して居つたことである。かくて回を重ねる十五、昭和五年の末に君が多忙なためと、他の事情とで本誌も中止するにいたつた……氏について特に忘るべからざるは本誌の創始の大恩人であるといふ事である。側聞するに當時氏は泊園誌が出来たら死んでも遺憾はないとまでいはれたさうである。(「吉田洞外を憶ふ」、第一卷第二号、昭和十七年八月) また、吉田と同窓だつた岡本勝治郎(後述)も、

昭和二年十二月二十二日泊園誌が發行されることになり君が専ら之を擔當してやられるといふので大に期待してゐたことで有つたが、其の後君は病氣の爲め辭退され夫れが爲め誌も一時中斷の已むなきに至つた。(岡本時笑「吉田一樂君を憶ふ」第一卷第三号、昭和十七年十二月。岡本時笑は岡本勝治郎の筆名である)

といっている。

こうして吉田が編集を退くとともに、その奮勵によって支えられてきた本誌も中止のやむなきに至つたのである。

2 第二期

さて、第一期が停刊して三年後の昭和八年(1933)八月、本誌は復刊される。編輯兼發行者は吉田に代わつて梅見春吉があたり、しばらくして的場信太郎が担当した。

これは本誌を再刊すべきだといふ声が高まるとともに、また泊園関係者全体のバックアップがあつたからのようである。石濱は復刊後まもなく「泊園誌を守れ」と題する記事でこう述べている。

泊園誌の目的は、内は泊園一般の情況を報じ、外は漢學を獎勵するにあるは、今更に喋喋する必要

7) 「有聲會消息」(第一号、昭和二年十二月)、坡叟「吉田洞外を憶ふ」(第一卷第二号、昭和十七年八月)。

もない。……舊泊園誌が創建されて幾歳、誌そのものは只誌の目的に従つて活動してみたのだがその隠顯數年の努力はたゞに誌の目的のみならず、泊園書院の事業を總括しての背後の力を養成しつゝあつたのである。さればこそ泊園休刊すべからず、再興せざるべからずと、同志が起つて新泊園誌が後を承けて出るに至つたのだ。たゞ誌の目的達成だけだつたら、今の様に熱心に奮然従事しなくても事は足りる。世間通塗の同窓會誌でも結構十分なのである。今にして余も亦泊園誌が同窓會誌以外のものでなければならぬ所以を明かに識つた新舊泊園誌建設の同人諸兄に滿腔の敬意を表せねばならない。（新第十五号、昭和十年五月）

ここには、泊園書院の事業を支える「背後の力」の存在と、単なる同窓會誌を越える學術誌的新聞の必要が求められたことが述べられている。こうして石濱もいう「新泊園誌」が出発する。

編輯兼発行者となった梅見春吉（1875-1937）は福井県出身、南岳時代からの泊園門人で、泊園同窓會幹事を篠田栗夫とともに長くつとめた重鎮であった。また泊園書院の講師もつとめ、「梅見先生の口合ひ好く立板に水の様な流暢な講義は又一種の魅力を以て聽講者を引付ける者が有つた⁸⁾」と、その講義の魅力が伝えられている。大阪南郊の田辺（現：大阪市東住吉区）に住み、私塾の正和書院を開いて教育にいそしみ田辺亜聖の称があつたという⁹⁾。泊園文庫（自筆稿本）の中には梅見自筆の『泊園日誌』（大正六年以降）も残されている。

このほか、この時期に編輯同人として貢献した人物に多田貞一（1905-？）がいる。多田は兵庫県出身、泊園で漢学を学び、昭和六年（1931）に第五臨時教員養成所（大阪外国語学校）国語漢文科卒業、ついで昭和七年（1932）、難関の「高教」（高等学校教員検定試験）漢文科に合格した秀才であつた。新第一号（昭和八年一月）の「會員消息」欄には「多田貞一氏 昨年臨教を卒業し直ちに今年高等教員試験を受けて合格せり、氏の如き若き年にして通過したる者從來に無し」と報告されている。本誌編集に加わつたのは新第一号から第十二号（昭和九年十一月）である。多田は高教合格後の昭和八年（1933）に神戸県立第三中学校教諭となっているから¹⁰⁾、その勤務の間をぬって編集作業にあつたことになる。

ついでにいえば、多田はその後、大連中学教諭を経て、昭和十四年（1939）から北京の興亜院華北連絡部政務局に勤務し、昭和十八年（1943）十月、北京で設立された東方民俗研究会の幹事となつた。東方民俗研究会は石濱とも関係の深い団体で、多田は北京時代に名著『北京地名誌』（周作人序、1944年）を、東方民俗研究会の事業の一つ「東方民俗叢書」の第一巻として北京の新民印書館から出版している¹¹⁾。

さてその後、復刊五年目を迎えるにあたって、石濱は「泊園誌の第五年」（新第二十五号、昭和十二年一月）と題する記事の中で「ともすれば發行不能になりそうな經濟状態で居り乍らよく是れ迄維持して社會に對し書院に對し多少の效驗をなし得た」とふり返っている。實際、この第二期の刊行状況を見ると、最後の新五十五号と新五十六号の間が四ヵ月空いているのを除けば、隔月一回發行のペースがほぼきちんと守られ、毎年六号ずつ出されているので、發行が軌道に乗つたことがわかる。石濱そして黄坡

8) 岡本勝「泊園の思出ばなし」（新第十六号、昭和十年七月）。

9) 「有香梅見先生逝去」（新第三十一号、昭和十三年一月）。

10) 「會員消息」（新第三号、昭和八年五月）。

11) 多田貞一『北京地名誌』末尾の「著者略歴」、『東方叢』第一号（北京、1944年）。澤田瑞穂「東方民俗研究会のことなど——橋川子雍先生回憶の一節」（今村与志雄編『橋川時雄の詩文と追憶』、汲古書院、2006年）。

としても得意の時期であったろう。

3 第三期

昭和十七年（1942）七月頃に第一巻第一号を出したようだが、なぜそれまでの第二期を終了し号数の数え方の違う第三期に移行したのかは、当の第一巻第一号が欠号になっていることもあって、よくわからない。戦争の影響なのか、あるいは他の理由があったのか、今のところ不明である。

ともあれ、第二巻第一号（昭和十八年三月）からは編輯同人の顔ぶれや印刷所も変わる。また同号の編輯後記に「幸に今度編輯室も新設され先生方始め大いに張切つてゐます」とあるのは、戦時中でありながら、関係者がなお意気軒昂として編集作業にあたっていたことを物語っている。

しかしこの第三期は、隔月一回という刊行ペースを何とか維持しながらも、昭和十八年（1943）九月の第二巻第四号をもって停刊となる¹²⁾。

編集者としてこの時期活躍した一人が三原研田（1915-1996）である。三原は滋賀県出身で、本名は静美、研田はその号で、書道家であった。昭和八年（1933）甲陽中学校を卒業するが高等学校には進学せず、家学の書道を継ぐため泊園書院に入塾し、漢学を黄坡と石濱純太郎に学ぶこと十年に及んだ¹³⁾。その間、新第十四号（昭和十年三月）から編集同人に加わり、最後までその任にあった。

三原は泊園書院で学習に励んでいた昭和初期のことを次のように回顧している。

泊園書院での約十年間は私を培う上に大きな意義をもつことになった。……私は晩期の書院〔その頃は南区竹屋町にあった〕に通学して黄坡先生とその義弟石浜純太郎博士に従い論語彙纂、春秋左氏伝、陶詩、杜詩の講義、説文段注、两周金文辞や天壤閣甲骨文存などの演習をうけた¹⁴⁾。

これは黄坡および石濱の講義が漢学研究においてきわめて高度な内容を保っていたことを示す証言である。なお、三原はその後、文検（師範学校中学校高等女学校教員検定試験）の習字科に合格して大津市立高等女学校教諭となり、戦後は昭和二十五年（1950）から滋賀大学教育学部助教授、四十七年（1972）に同教授となる。書道家としても成績をあげ、昭和二十九年（1954）関西総合美術展首席、三十三年（1958）日展特選、四十五年（1970）には滋賀県書道協会会長となった。三原は泊園で学術的訓練を受けた最後の人物といえるかもしれない。

もう一人、編集者として注意すべきは岡本勝治郎（1885-?）である。香川県出身の岡本は大阪で小学校訓導をしながら泊園に通い、南岳ついで黄坡の講義を聴くこと十二年に及んだ。その甲斐あって大正九年（1920）文検の国語及漢文科に合格、さらに東京の大東文化学院高等科を卒業、ついで東京の京北

12) 第一巻第四号は刊行されなかったようである。それは連載記事である效尤生「説詩樂趣」と黄坡「論語講義」の連載回数が第一巻第三号と第二巻第一号でとぎれなく連続していることから知られる。なお、第一巻第三号の「説詩樂趣」に記される(38)は(39)、すなわち第39回の誤植である。

13) 三原研田の『研田書記』（私家版、1975年）と『研田不枯』（同、1985年）の記述、および『書論』第三十五号（特集：三原研田の人と書と学問、書論編集室、2006年）による。なお、三原については杉村邦彦教授およびご子息の三原博氏から教示を得、また貴重な資料を提供していただいた。

14) 「兎園札記」の「泊園書院」、前掲注『研田不枯』112頁以下。

中学校教諭を経て、昭和十三年（1938）関西大学講師、翌十四年に予科教授となった¹⁵⁾。黄坡、篠田栗夫、あとに述べる吉永登らとともに泊園と関西大学をつなぐ人物の一人でもある。岡本は当時、とりわけ熱心かつ優秀な泊園塾生で、昭和十一年（1936）三月七日の黄坡華甲祝賀会では門下生総代として祝辞（漢文）を奉っている¹⁶⁾。本誌編輯同人は新第三十七号（昭和十四年一月）から、停刊となる第二巻第四号まで長くつとめ、また泊園塾生だった頃の思い出を本誌に断続的に連載している¹⁷⁾。

4 発行費用について

発行の費用であるが、第一期は定価が「一部金拾銭 一年前金一壹圓（郵税共）」であった本誌は、第二期より非売品になった。では、どのようにして費用を工面していたかという点、基本的に泊園関係者からの寄付によってまかなわれていた。本誌の記事を見ると、たとえば第一期には「本誌後援寄附金報告」「本誌後援寄附金収受報告」として金額と寄付者の氏名が毎号載っている。

もっと大きかったのは泊園同窓会と泊園会からの寄付である。第一号に載る泊園同窓会の会計報告には早くも「金壹百四拾五圓貳拾八錢也 右殘金は本誌發行費に充當可仕候」と、百四十五円を発行費として寄付する旨、報告されている。その後も毎号のように「本誌後援寄附金（泊園同窓会）」として金額と寄付者の氏名を載せており、同窓会からの多くの援助によって本誌が維持されていたことがわかる。第十号の編輯記事に「今の所は紙上御覽の如く維持費の御捐金が多い上に、同窓會から常費の中より補助して頂いてみますので、何等經濟的には更に苦痛はありません¹⁸⁾」とあり、同窓会の援助により経費面ではわりあい余裕があったことを示している。他にも第二期には泊園誌社の会計報告が載っており、たとえば新第十八号（昭和十年十一月）の「泊園誌社事業の一斑」によれば、昭和十年一月号から九月号まで、発行経費として四百円を支出したと見える。

このほか、泊園会からも資金援助を受けている。泊園会は泊園同窓会の上部組織で、昭和九年（1934）九月に新たな組織が発足したが、本誌に対する援助は当初は考えられていなかった。そのことは「泊園会第一回定時總會報告書」に、常任理事会の決定事項として「泊園誌ノ刊行ハ暫ク従前通ノ經營ニ委シ本會々費ハ之ニ使用セズ専ラ積立貯蓄シ以テ將來ノ大成ヲ期スルコト」あることからわかる¹⁹⁾。しかし泊園会はその後、本誌に補助金を出すようになったらしく、昭和十二年（1937）七月の報告では「泊園會業績」として「泊園誌社へ雑誌發行補助金として毎年金貳百圓也交付」とある²⁰⁾。

このように、本誌は泊園同窓会、泊園会をはじめとする関係者の寄付によって維持されたわけである。

15) 岡本勝「續 泊園の憶出」（新第三十八号、昭和十四年三月）。岡本勝はその筆名である。岡本については、このほか関西大学年史編纂室の資料による。また、新第四十号（昭和十四年七月）「会員消息」にも「関西大学講師岡本勝治郎氏は今般同大学教授に任命せらる」とある。

16) 岡本勝「奉壽 黄坡夫子序」（新第二十一号、昭和十一年六月）。

17) 岡本勝「泊園の思出ばなし 泊園書院分院設立當時（上）」（新第十三号、昭和十年一月）以下、13回ほど回想を載せている。

18) 「舌代」（第十号、昭和五年五月）。

19) 「泊園會第一回定時總會報告書」（新第十二号附録、昭和九年十一月）。

20) 「泊園會報」（新第二十八号附録、昭和十二年七月）。

これは言い換えれば、泊園関係者の人脈が保たれていたこと、かなり強い団結力と集金力があつたことを物語るものでもある。

三 本誌によってわかること

さて、本誌は昭和時代の泊園書院の活動を示す貴重な資料であり、今後、大いに活用されるべきものと思われる。かつて筆者は『泊園書院歴史資料集』や「泊園書院年譜」の作成の際、本誌を大いに参考にさせてもらったこともあり²¹⁾、以下、興味深い事項を気づいた範囲で少し紹介してみたい。

1 昭和時代の泊園書院の動向

まず、いうまでもないことだが、昭和時代の泊園書院の状況を示すソースとしての価値がある。たとえば毎週の時間割である「泊園書院日課」がたえず掲載されているのは、書院の講義内容を示すものとして重要である。新第二号（昭和八年三月）以降、ほぼ毎号にわたって連載され、全52回に及んだ黄坡「論語講義」の連載も貴重である。この連載は書院における黄坡の講義記録らしく、学而篇から始まり述而篇に至っている。南岳『論語彙纂』や黄坡らの旧作『論語彙纂通解』を継承する内容で、泊園の『論語』学の展開を知る好個の資料といえよう。

「泊園文芸」欄では門人の漢詩・漢文の作品を載せ、新第十号から第二卷第三号まで、全42回にわたって連載された筆名・効尤生の「説詩樂趣」は、泊園における漢詩文学の好エッセイとなっている。

このほか道明寺土師神社（天満宮）や泊園書院内における釈奠、藤澤家の菩提寺である齡延寺における展墓（墓参り）、南岳十三回忌法要（新第一号）、菅甘谷先生百七十年祭（新第十号）、中山城山先生百年祭（新第二十七号）、東暎先生第七十五周忌祭典（新第三十八号）などの記録も、さまざまな泊園関係者の活動の一端を表わすものである。昭和十三年（1938）十月、石濱が中心となり、懷徳堂を会場として開かれた大規模な第七回漢学大会の報告も興味深い（新第三十五号、新第三十六号）。

昭和十一年（1936）四月三日、黄坡の還暦を祝う華甲祝賀会が東区備後町（現：中央区備後町二丁目）の綿業会館で開かれた時の様子も写真入りで報じられている（新第十九号～新第二十二号）。綿業会館は現在、国の重要文化財に指定されており、大阪を代表するこの近代建築を使って挙行された大規模な祝賀会の報告を見ると、当時、泊園書院および黄坡がいかに大阪人の人望を集めていたかがよく伝わってくる。

新第六号に載せる泊園書院（もと分院、のち本院）正面玄関の写真も貴重なもので、その建物のつくりや大きさを彷彿とさせてくれる。門標にある「泊園書院」の文字は大村屯（号は楊城）の筆になる²²⁾。

2 泊園関係者の消息

泊園関係者の消息も多数載せられている。前述した泊園同窓会、泊園会、有声会の報告や名簿などが

21) 注2前掲、吾妻編著『泊園書院歴史資料集』。

22) 岡本勝「泊園の憶出」（新第三十四号、昭和十三年七月）。

たえず掲載され、関係者の顔ぶれや動向がわかる。関係者ということでは、第十五号（昭和五年十一月）に、黄鵠七回忌の時に齡延寺山門前で撮られた集合写真とともに、その氏名をすべて載せているのはたいへん貴重である²³⁾。これによって人々の面貌がみなわかるからである。

また、訃報や転任、転居の情報もたえず載せられており、これによって我々は泊園関係者の貴重な情報を得ることができる。たとえば永田仁助、村田又兵衛、鎌田衡、西本教寛、豊田隆、阪本準平、右田三吉、篠田栗夫、牧野謙次郎、宮崎貞吉、梅見春吉、渡邊盤山、河田為作、鷺田又兵衛、白藤丈太郎、川合孝太郎、筒井民次郎、越智宣哲、吉田萬治郎らについては訃報が載っており、場合によっては年譜や略歴、さらには写真まで掲載している。三崎麟之助、藤澤成太、藤澤桓夫、今村春二、藤澤妙子、藤澤定子といった藤澤家およびその縁戚の人々の訃報や消息も見ることができ、写真がつけられることもある。

多田貞一、三原研田、岡本勝治郎、吉永登、鴨居武らの名も登場する。多田と三原、岡本についてはすでに述べたが、吉永登^{みのる}（1906-1989）は奈良県出身で、関西大学専門部国語漢文専攻科第一期生を卒業後、泊園で黄坡に漢学を学んだ。そして昭和八年（1933）、難関の「高教」（国語科）に合格、昭和十八年（1943）に関西大学専任講師ついで教授（専門部）となった。戦後は関西大学文学部教授、文学博士となり、文学部国文学科の中心として活躍、さらに文学部長、東西学術研究所長を歴任し、昭和五十年（1975）には泊園記念会長となった人物である²⁴⁾。筆者は、迂闊にも吉永教授と泊園の関係を見落としており、今回、本誌を調べる中でそれを確認した次第である。

また鴨居武（1864-1960）は旧高松藩出身で、父の忠次郎は東暎と交遊があり、明治四年（1871）、私財を投じて郷校「明善堂」を作った。そのような関係もあり、武は少年時代に大阪に出て泊園で南岳に二年間学んだ。その後、洋学に転じ、第一高等学校を経て帝国大学工科大学（のちの東京大学）を卒業、のち東京帝国大学工科大学教授、工学博士。日本化学会会長もつとめ、日本における応用電気化学の権威となった。香川県人の東大合格者第一号、博士号取得者第一号といわれる²⁵⁾。筆者もつい最近、泊園出身者にこの人ありと知ったのであるが、本誌においては同窓会名簿に名前が見えるほか、新第四十三号（昭和十五年一月）に「詠水」と題する漢詩が載っており、その署名から号が敬軒であったこともわかる。鴨居武の作った漢詩というのはかなり珍しいのではあるまいか。

このほかにも、本誌によって泊園関係者であることがわかる人物は多いと思われる。本誌の活用が期待されるところである。

23) なお、大阪府松原市の中山経正氏はこの写真とともに、全員の名前を記した名簿を所蔵しておられる。氏は泊園の有力な門人であった中山潔のご子孫にあたる。

24) 『国文学』第五十二号「吉永登先生古稀記念上代文学論集」（関西大学国文学会、1975年）、「座談会 泊園を語る」（『泊園』第四号、泊園記念会、1965年）。

25) 「鴨居武」（津森明ほか『讃岐人物風景11 明治の巨星たち』、四国新聞社、1984年）、さぬき市歴史民俗資料館「明義堂・鴨居家展」（2016年三月～五月）の展示資料。また鴨居武の名は泊園門人録である『登門録補遺』（関西大学泊園文庫蔵）にその名が見える。

3 泊園関連資料の調査・研究

本誌が学術誌的性格をもつことは前にも述べた。石濱が号の太壺、筆名の甘菱、魚石、白水生のもとに書いた数多くのエッセイは石濱らしい実証的内容をもっており、川合孝太郎、多田貞一、岡本勝治郎らによる記事にも学術性の高いものがある。

中山城山に関する調査・研究を載せているのも特色の一つである。前に述べたように、新第一号には城山の略伝を載せ、ひき続き「城山道人稿」を附録として添付している。新第八号には肖像の写真を、新第十五号には城山の「黄庭経略註序」を翻刻して載せている。さらに昭和十二年（1937）がその没後百年にあたることから、泊園書院は高津神社を会場として中山城山先生百年祭を催すとともに、その遺墨・遺著を展覧し、新たに刊行した『城山道人稿』を頒布した。本誌にはこれらの行事に関する記録のほか、肖像・遺墨の写真、石濱による遺書の解題、収集した城山の印譜などを載せており、現在においても有用な資料となっている（新第二十六号、第二十七号）。

城山が東暎に贈った「守泊苑」の書額の写真もある（新第二十六号、図版2）。東暎の号の「泊園」の名の由来となった呼称であり、淡路町時代から書院に伝えられてきたものである²⁶⁾。現在、この書額は失われており、きわめて貴重な写真である。

東暎の研究に関しては、黄坡と石濱は東暎が幕末の文久三年（1863）、大坂の御城入儒者および尼崎藩主の賓師になったときの書状を新たに見出し、翻刻掲載している²⁷⁾（新第十九号）。また、これより少し前の嘉永四年（1851）、東暎が大坂城加番役の豊岡藩主京極高厚に大坂城内に招かれて『論語』を講義した時の記録としては、新第二十四号に載る鎌田春雄の文章「東暎先生大阪御入城次第」が高松藩家老木村黙翁の随筆を引用しており、これまた重要資料となっている²⁸⁾。

東暎に関しては、肖像の写真が二点掲載されているのも見逃せない。新第七号と新第二十七号がそれぞれであるが、前者は戦前の『東区史』第五巻・人物篇（大阪市東区役所、1939年）に載っている写真と同じで、当時、泊園書院の所蔵であったが、現在、原本は失われている。筆者の『泊園書院歴史資料集』口絵には『東区史』所載のものを載せているので参照されたい²⁹⁾。また、後者の肖像は現在、高松市塩江美術館に所蔵されており、黄坡のご息女の藤澤昭子氏から寄贈されたものである（図版3）。

南岳に関してもさまざまな資料や遺文が載せられているが、注目されるのは明治五年（1872）、讃岐高松に戻っていた南岳が高松の中ノ村天神前に開いた泊園塾の「泊園学則及塾則」を第六号に載せている

26) 「泊園雑感」（第一号、昭和二年十二月）に黄坡の話として「淡路町の頃に坐敷の次の間に、『守泊苑』と書いた額がかゝつて居りました、上町では茶間の次の間に、只今は鶴橋の宅の二階にあります」という。「上町」とは東区東平野町にあった本院。「鶴橋の宅」とは黄鵠の居宅かと思われる。

27) これらは注2前掲、吾妻編著『泊園書院歴史資料集』83頁以下で紹介した。このうち尼崎藩主賓師就任に関しては吾妻重二「泊園書院に関する史実について」（吾妻重二編『泊園記念会創立五十周年記念論文集』、関西大学出版部、2011年）で考察した。

28) なお、この京極高厚による招聘をめぐる書状群が「尊道巻」と題して伝わっており、『第貳拾貳回泊園同窓会誌』（1911年、泊園文庫自筆稿本）がそのすべてを翻刻して載せている。本誌のこの記事と同窓会誌の翻刻を本学の藪田貫教授に示したところ、たいへん興味を持たれ、他の資料を加えて論文「泊園書院と「尊道巻」——藤澤東暎とその周辺」（藪田貫・陶徳民編著『泊園書院と大正蘭亭会百年』所収、関西大学出版部、2015年）を発表された。

29) 注2前掲、吾妻編著『泊園書院歴史資料集』口絵。

ことある。牧野謙次郎所蔵の南岳手写本で、明治新政府の私塾政策に応じて文部省に提出された資料の写しである。これによって、明治初年の泊園塾がどのような規則のもとに運営されていたかがわかるのである³⁰⁾。

新第三十一号（発行十年特輯号）の巻頭には富岡鉄斎（1837-1924）筆になる、鉄斎・南岳春遊図の写真が載っている（図版4）。鉄斎の賛によれば、明治十四年（1881）四月一日、南岳が和泉大鳥神社（現：堺市大鳥大社）に鉄斎を訪ね、梅の花の下で半日閑娛した姿を描いたという。南岳と鉄斎は美術品の論評等を通じて交遊があったことは旧稿でも指摘したとおりである。この画も現在は伝わっておらず、はなはだ珍重すべき写真といえよう。

南岳に関してはもう一つ、南岳最初の妻に関する記事を今回見出すことができた。新第五十五号の草薙金四郎「藤澤南岳と鐵兜」および第五十六号の同「藤澤黄坡翁より示教」の記事がそれで、これらによれば、南岳から播州林田藩の河野鉄兜に宛てた手紙に「拙荆妻病在牀者數月、終以仲春望死矣」とあるのにつき、黄坡に問い合わせたところ、亡くなった妻というのは南岳の先妻の水野豊のことで、墓所や過去帳を調べた結果、慶応二年（1866）二月十五日に没したことが判明したという。実は、南岳最初の妻について筆者は、かつて『平野含翠堂史料』により慶応二年に死去したことまでは調べたのであるが³¹⁾——黄鵠や黄坡、黄圃（三崎驩之助）の母の牧野仙は、南岳の後妻ということになる——ただ、その名や亡くなった正確な日付はわからなかった。これによってそれが明らかになったのである。

黄鵠については、南北朝正閏問題により衆議院議員を辞職した際、石川啄木が同情してこれを歌に詠んだことは藤澤桓夫が話題とし、筆者もこれを紹介することで今では有名なエピソードになっているが³²⁾、実は本誌にすでに取り上げられていた。新第十三号に啄木の歌「藤澤といふ代議士を弟のごとく思ひて、泣いてやりしかな」を引き、「議事に於ける若き黄鵠先生の一本氣な奮闘の姿が、若き啄木の共感を呼び、それが所謂ニコボン主義に對する憎惡となつて進つた所にこの歌が成つたのではあるまいか」と評しているのである。筆者はT生の筆名を使っているが、記事の書きぶりからして、あるいは藤澤桓夫自身かもしれない（Tは桓夫^{たけお}の頭文字）。

このほか、前にも触れた、岡本勝治郎による往時の泊園書院の回想も、大正時代を中心として泊園書院の状況を詳しく記してたいへん貴重な報告となっている。

4 太平洋戦争と泊園書院

最後に、戦前・戦中に出版された新聞として太平洋戦争（大東亜戦争）と泊園書院の関係が本誌には伝えられている。この戦争に泊園はどう対応しようとしていたか——結論を先取りしていえば、石濱も、またかつて日露戦争で軍功を立てた黄坡も、戦争に対しては驚くほど冷静であり、狂信的な軍国主義や国粹主義といった論調はまったく見受けられない。

戦争時期、石濱は白水生の筆名でくり返し漢学の重要性を説いている。石濱によれば、東亜の中心を

30) この「泊園学則及塾則」は、注2前掲、吾妻編著『泊園書院歴史資料集』236頁以下に転載した。

31) 注27前掲、吾妻「泊園書院に関する史実について」。

32) 注2前掲、吾妻編著『泊園書院歴史資料集』141頁以下。

なす文化は漢学であり、これを抜きにして東亜の理解はありえない。そして東亜新秩序の盟主たらしめるのであれば、我々は漢学を立派なものに築き上げなければならない、という。たとえば「漢文へもどれ」（新第三十八号、昭和十四年三月）では、

現時重要時の一は支那を十分明白に知っている事である。その支那を十分に知るには漢文の力が要件である。

といい、「泊園を盛んにせん！！」（新第四十一号、同年九月）では、

漢學は我國の學問でもあるが、元來は支那の學問である。支那で數千年の間に築き上げた學問なのである。支那に關係が出来て之を理解するのは漢學による外はない。漢學を中心とせずして將た何によらうとするんだらう。……漢學の盛んにならなければならない時代に盛んでないのは、東亞新建設東亞新秩序の稱道せらるゝ今日我國の恥辱である。又それは我國の損害である。

という。さらに「東亜新秩序に對する漢學」（新第四十六号、昭和十五年七月）でも、

東亞の智識は漢學に集積されている。……その智識を此際利用しなくてどうするだらう。再検討も三検討もせねばならないのである。……近き將來の漢學の權威を正しく把握して、東亞新秩序中に立つて諸國をして仰いで正に就かしめねばならないのである。あやふやなる漢學であつては、彼等をして我を輕侮せしむるに至るであらう。それでは新秩序の中心になれないのだ。といている。

戦争が激化しつつある中においてもこのような主張はまったく変わらず、「大東亞戦争と漢學」（第五十五号、昭和十七年一月）では、

大東亞は廣い。我國は大東亞の指導者たならなければならないから、大東亞全部の研究の中心とならなければならない。大東亞諸方の學術研究は急速に躍進せねばならない。

といている。つまり石濱にとって、日本が大東亞の中心になるということは、漢学に集積された大東亜の文化を研究する中心になるということであった。「あやふやなる漢學」ではなく、すぐれた「學術研究」としての漢学を振興することがこの戦争において何よりもまず求められるという。

もちろん、時局を反映して戦争を賛美するような口吻も見受けられるが、古典研究や漢学の発展こそがこの戦争において最も重要なものだとする主張は一貫して、きわめて印象的である。古典研究を紐帯として東アジアを結びつけようとする、一見迂闊だが、しかし理性的な態度が、泊園書院をファナティックな軍国主義に陥るのを救ったのである。このことは大きな問題であり、別に論ずべきテーマであろうが、昭和の最も困難な時期にリベラルとでもいべきこうした理念を泊園書院が持っていたことを、その学統を受け継ぐ立場にある一人として光栄に思うものである。

おわりに

すでに述べたように、新聞「泊園」は昭和期における泊園書院の活動を示す重要な資料である。初めは毎月一回、しばらくして隔月一回の発行となり、戦争の影響などにより間隔が空くこともあったが、ともあれ16年という長期間にわたって刊行されたばかりか、太平洋戦争が激化し、物資や食料の不足に見舞われていた昭和十八年九月まで続いたことに驚かされる。これは大阪の空襲が始まる一年あまり前のことである。

ここでは書誌事項を中心に、刊行の経緯や編集者の顔ぶれ、本誌の特色を概略示したにすぎないが、それでも得られたことは多い。

たとえば吉田萬治郎、多田貞一、岡本勝治郎、三原研田、吉永登らと泊園との関係を新たに指摘することができたし、黄鵠七回忌の際の齡延寺前における集合写真とその人名リスト、中山城山の印譜、城山が東暎に贈った扁額「守泊苑」の写真なども紹介することができた。南岳の最初の妻に関しても、今回初めて詳しい情報が得られたのである。また、泊園書院の学術が太平洋戦争にどう対応しようとしていたのかについても一定の見通しを示すことができたように思われる。

本誌は黄坡と石濱、そして多くの泊園門人たちの協力と支持により刊行された新聞であり、今後、泊園の学術や人脈はもちろん、日本近代の漢学や東洋学、大阪文化・文芸の研究などを進めるうえでも重要な情報が詰まっているといえよう。

* 本稿は本学の「平成27年度 創立130周年記念特別研究費（なにわ大阪研究）」の研究課題「泊園書院の調査・研究の充実と展開」助成による成果の一部である。

泊園同窓會常費收受報告

(昭和十一年度)

金堂 正信氏 (昭和十一年度)

尾崎 正信氏 吉永 茂七氏
大西 成古氏 阿部 孝之進氏
西門 岩松氏 西門 孝之進氏
田中 木田氏 鴨居 三郎氏
中野 三郎氏

澤 純三氏
沖野 三郎氏
仲野 安氏
仲野 安氏
木六 正武氏
木六 正武氏
平照 然氏
平照 然氏
信氏

**城山先生
の遺著二三**

城山先生の著述に就いては、東城先生の撰せられたる行狀に詳かに其名目を掲げられ、四十七部百二十五冊にも及んでゐる。遺著の大部分は未だ刊行されてゐないものであるが、遺稿は高松なる藩侯の館に保存されてゐると聞くのは愉快である。多少なりとも何か流傳の方法を講じたいものと思ふ。

今回黄城先生の御指書によつて紀念出版を爲し得る「城山遺稿」は、的場菊堂子の珍藏する所であるが、これは行狀の目に出でないものである。固り此書は多分行狀に云ふ所の城山前後集中に著録されてゐるんだらうが附集を世に傳へ得ない限りは此書で満足する外はない。一百周年記念としては實に好箇の出版と感ずる外はない。

三崎先生御所蔵の「黄庭經略注」も既に誌上で紹介されてゐるが、これは行狀に黄庭經解とあるものに相違ない。先生晩年の著述で思想上にも興味あるものである。

城山遺稿は未見であるが論議の痛快なるものと聞いてゐる。その味を知るを得た。蘇武山の崇宏を論議して蘇武山の太宰春泰を辯護したものである。蘇武山の孟子攻撃は珍しからぬが鋭利なる反駁は頗る見るに足る。但し我が東城先生の思問録の如きものでないで、思問録は獨立の價值を持つてゐる。

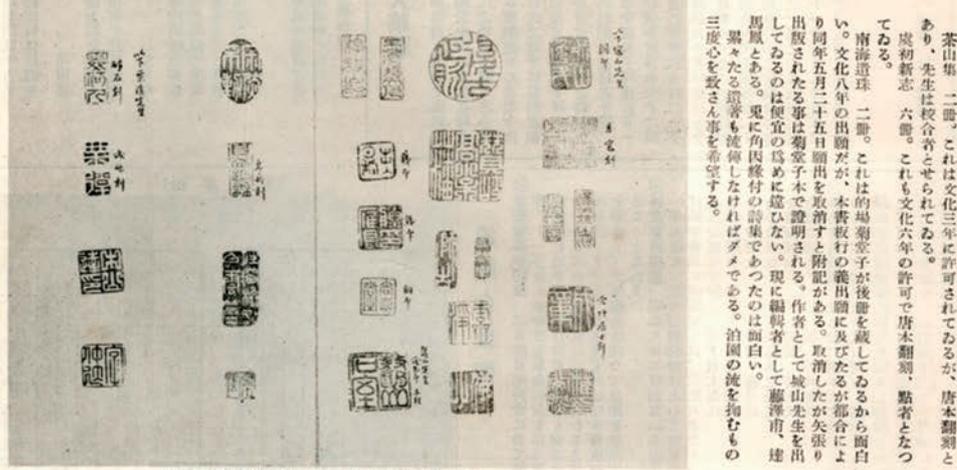
城山先生には孟子辨解の著が行狀に見えて居り、南岳先生の蘇批孟子の欄外に引用してあると云ふ。博覽多識で鳴る所の眞粹山宅少太郎先生も之を知られてゐて、川合泰太郎先生に問うて城山の著である事、城山の如何なる人であるかを知つたと云ふ。其書の流傳の少きを知るに足らう。

享保以後大阪出版書籍目録によると城山先生關係のもの四つ出てゐる。

非譯文要訣 一冊。これは行狀には辨譯文要訣となつてゐる。これは高安産屋の譯文要訣を非難したものであつたが、附記に本書の出願に對し板行相成らずと申渡された事がある。何か面白い事情がありそうである。



新書しれら贈へ生先東東りよ生先山城



(藏氏郎次照岩平) 譜印生先山城

茶山集 二冊。これは文化三年に許可されてゐるが、唐本翻刻とあり、先生は校合者とせられてゐる。

慶初新志 六冊。これも文化六年の許可で唐本翻刻、點者ととなつてゐる。

南海遺珠 二冊。これは的場菊堂子が後節を蔵してゐるから面白い。文化八年の出願だが、本書板行の義出願に及びたるが都合により同年五月二十五日願出を取消すと附記がある。取消したが矢張り出版された事は菊堂子本で證明される。作者として城山先生を出してゐるのは便宜の爲めに違ひない。現に編輯者として藤澤甫、埴馬鳳とある。兎に角因縁付の詩集であつたのは面白い。

累々たる遺著も流傳しなければダメである。泊園の流を拓むもの三度心を致さん事を希望する。

**泊園
誌社**

(顧問) (同人)

黄城 先生 石崎 太郎
石濱 純太郎 三原 静美
梅見 春吉 岡本 喜三

上凱歌山聯句

春光華嶽鎮歌嶺。邦内山川一望舒。城山
朝裡孤城枕大海。雲間五嶽聳高天。空三靈
東來萬壑蒼波湧。北望千嶺白雲騰。中山勝
共許登高大夫興。始知小阜仲尼賢。無名氏
數家點地傍桑出。一鶴橫空斥鷃段。空有光
猶作當年鼓鼙聲。城嶽晚吹轉凄然。埴馬鳳

凱歌山懷古聯句

會開天正歲。營帳此間仇。城山
五百群駿馬。三千伏猛獅。無名氏
軍派孟門險。無那項王謀。空三靈
城郭總陳跡。晉標又古丘。中山勝
騎除舊鬼哭。長有悲風愁。空有光
兜神山頭徑。登來涕泗流。埴馬鳳

**七月六日
八堤遊行聯句**

聯歌今夜夜同盟。數里八堤共宴行。城山
虛海涼風飄暑去。鄰期織女待郎明。木華
漁歌道過御妓女。漏鼓城々傳府城。邊韶
遺迹忽得治河縣。開通終忘人世營。泉介
洗耳豈徒頌水德。濯纓亦在漢江清。藤甫
對此風情更無限。月明石上坐吹笙。中山勝

**奉送
家嚴之浪華刻
南海遺珠三首限韻**

其一 藍山 中山 聊

服事平生誦諸葛。即今分手文房佩。
鱗舟津口期潮汐。肆席江邊傍路隅。
別字形如冥雁列。彩毫畫似落花敷。
可知今歲中秋爽。紙上玲瓏南海珠。
(藍山遺稿)

図版2 「泊園」新第26号 (昭和12年3月1日)
中山城山が東咳に贈った「守泊苑」の扁額
(上の写真)と中山城山印譜(下の写真)。



図版4 「泊園」新第31号（昭和13年1月20日）
富岡鉄齋筆 春遊図。和泉大鳥神社（現：堺市大鳥大社）における鉄齋と南岳の閑娛の姿を描く。当時、藤澤家に蔵されていたものだが、現在は伝わらない。

